

<全体分析>

試験時間 90 分

解答形式

論述式・記述式

分量・難易 (前年比較) 分量 (減少・変化なし・増加) 難易 (易化・変化なし・難化)

大きな分量の変化はなく、昨年と同様に時間的余裕はない。

昨年と比べて「難」の問題がなくなったが、小論述問題が増加したことなどから、難易は変化なし。

出題の特徴

I・IIがアジア史中心、III・IVが欧米史中心という出題範囲の大きな枠組みに変化はない。

その他トピックス

II Aで、小論述問題が出題された (2009年以來)。

IVは、従来A・B・Cの3問だったが、A・B 2問となった (1998年以來)。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	論述	匈奴の歴史	前3世紀から後4世紀初頭にいたるまでの匈奴の歴史について、中国との関係を中心に述べる300字論述。中国王朝ではなく匈奴を中心に書くことが求められている。	やや難
II	A 記述 論述	梁啓超の「新史学」	梁啓超が1922年に刊行した『中国歴史研究法』やそこに見える「新史学」をテーマに、古代から第一次世界大戦後までの中国史を中心とした問題。問(2)「王羲之」は『晋書』が、問(4)「禅宗」は「内省的」がヒント。	やや難
	B 記述	エジプトにおけるキリスト教徒	エジプトでのキリスト教の拡大やコプト教会の成立・発展がテーマ。問題は19世紀までのイスラーム史が中心。問(18)「サヌシー教団」が難しい。	標準
III	論述	1980年代の社会主義国家	1980年代のソ連・東欧諸国・中国・ベトナムにおける経済体制・政治体制の動向について、それらの国・地域の類似点と相違点に着目しつつ述べる300字論述。類似点・相違点についてどのように言及するかがポイント。	やや難
IV	A 記述 論述	古代・中世ヨーロッパにおける集団移動	古代・中世ヨーロッパにおける集団移動とその影響をテーマに、古代・中世のヨーロッパ史を問う問題。	標準
	B 記述 論述	バルト海周辺地域の覇権をめぐる諸国の争い	16世紀から第二次世界大戦後までのバルト海周辺地域の覇権争いをテーマに、中世から現代の欧米史を扱った問題。d 「ケーニヒスベルク」が難しい。	標準

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

近年、II・IVの記述問題や小論述問題でなかなか手強い問題が増えてきている。しかし、全体としては高等学校の学習範囲を越えるものではないので、教科書の内容を古代から現代まで「穴」のないように理解する学習を心掛けよう。そして、論述問題の出来が合否を左右するだけに、普段の学習のなかで、「歴史事象」の因果関係の理解に力点を置いて、「歴史の流れ」を正確に把握する学習を進めてほしい。また、中国史やイスラーム史、古代ギリシア・ローマ史など特定の地域・分野が毎年出題されているので、京都大学の過去問の研究を進めておくことは、有効な学習対策となるだろう。